納本

特230
814

渡支者のために

始

はしがき

本書は、當所内支那關係の研究員が、人々の渡支の際の心得用として、斯界の權威に資料を求め、其の口述又は執筆を得て編輯を試みた第一輯である。

廣大なる地域に、各種の民族より成る億餘の住民が、相當に異る言語習慣を以つて生活して居る支那の民情を、この小冊子に收むることは元より至難の業であるが、時局柄本冊子が、多少なりとも日支間の融合に資することが出來るならば幸甚であると思ひ、廣く當所員の支那に關する概念體得の便に供する次第である。

昭和十四年七月

東亞研究所報
編輯子

渡支者のために　目次

第一章　旅行心得……一
1　渡航手續……一
北支那……一
蒙疆地區……二
青島及濟南方面……二
上海及中支方面……二
2　奥地旅行の注意……三
旅行の心構……四
保護色の採用……四
奥地送金……五
第二章　應接の心得……六
1　支那人に接する心得……六

理財尊重……七
延命長壽……七
面子の扱方……八
儒教より實利宗教……八
隱忍の强さ……九
不得要領……九
應待の心得……一〇
2 支那人使用人に對する心得……一二
使用人の尊大性……一二
使用人の粘り强さ……一三
使用人の捨て身……一四
3 西洋人の支那人待遇法を見よ……一六
第三章 在留心得……二〇
1 衣食住に對する注意……二〇
服裝上の注意……二〇
日常食料の注意……二一
居住に關する注意……二一
2 支那語の學び方……二三
支那語の種類……二三
支那現代文……二五
支那語と日本語の相異……三一
第四章 宗教と秘密結社……三六
1 基督教徒に對する心得……三六
舊教……三六
新教……三八
信者に對する態度……四〇
2 回教徒に對する心得……四一
回教徒數……四三
回教徒の慣習……四四
信者に對する態度……四五

回教徒と一般漢人との差異……四六
3 支那に於ける秘密結社……四八
白蓮教……四九
哥老會……五〇
三合會……五一
青幫……五二
第五章 支那の習俗……五二
1 主なる年中行事……五二
舊曆……五二
新曆……五五
2 婚葬禮節……五五
婚禮の風習……五五
葬式の風習……五九

第一章 旅行心得

1. 渡航手續

時局の進展と共に、邦人の支那へ渡航する者は、日を經るに從つて增加の傾向にある。眞に事變の本質に徹し、新東亞建設の爲、多くの邦人が渡航されるのは、まことに望ましいことである。然しながら、やゝもすれば、事變遂行の目的を體せず、明確な目的もなく、たゞ漫然と渡支する者もあり、一攫千金を夢みて渡支し、却つて國策に副はざる言動をなす者もなしとせず、かゝる渡航者に對しては、當局で嚴重に取締ることになつてゐる。隨つて、支那へ渡航するには、種々の證明書或は許可書を必要とするが、現地の取締りが區々なる爲、手續も一樣でなく、これ等の事情に通ぜざる爲、種々支障を來す例が多い。旅行者は豫め、此の點に注意を要する。玆に、支那各地旅行者に對する取扱ひ方を一括して參考とする。

北支那 支那事變勃發直後、北支旅行許可制が實施されて居り、一般旅行者は、豫め現

住所の所轄警察署に、身分證明書下附願を提出して、その發給する身分證明書の携帶を必要とする。關東州及び滿洲國に於ても略々同樣の取扱規則が實施されて居り、現在では滿支人に對しても、これに準じて、取扱をなすことになつてゐるが、これは、本證明書の所持者にのみ國內歸還が許可されるためである。

蒙疆地區　「滿洲蒙古及び京包線沿線」以外の蒙古地區を旅行する者は「入蒙者取締暫行規則に依り、北支旅行身分證明書（北支經由の場合）の外に、在張家口兵團本部、又は特務機關、關東軍司令部の許可證を必要とする。

青島及濟南方面　山東省方面の旅行取締は相當嚴重であつたが、最近は幾分緩和された。膠濟線を旅行する際には、邦人は總領事、外人は特務機關、滿支人は宣撫班の許可を要する。

上海及中支方面　中支方面旅行者中上海にのみ滯在する者は、北支同樣身分證明書にて足るのであるが、上海を離れて奧地に旅行する者は現地軍部當局の許可を受ける必要がある。尙渡航者は原則として、五百圓以上携帶することを許されず、百圓紙幣も亦帶出を禁止されてゐる。且北支に於ては聯銀券、蒙疆に於ては蒙疆銀行券に入城の際必ず兩替すべ

きである。

2. 奧地旅行の注意

支那大陸の山間僻地、片田舍の祕境は警察もなく公安局の分署さへもなく、全く無警察と稱してもよい。無警察でこそあれ平時に於ては警察官一人必要もないといふ原始的な平和境であるところが多い。

奧地祕境は北支、中支、南支と異るところあるも大抵その僻地にありての生活相は和平の二字に盡きてゐる感がある。もとよりいつ何時疾風迅雷的に風雲暗憺たる悲劇が突發するか判らぬこともある。けれどもその暴風一過のあとは雨後の月の如く靜寂そのものといつた光景を見せる。さればいくら祕境奧地の探檢視察にしてもその行脚の際に於ける危險生命に不安を感ずる如きことは時と場合にもよることながらこればかりは豫めどうといふ用心をして掛るわけにもゆかぬ。最初から餘りに神經質であつては城內一つ散步出來ない。支那奧地旅行といつても、其の間特別のコツがあるわけではないが、多少心構へを記して見よう。

旅行の心構　奥地旅行を敢行するに就いては、その出發せんとする者の根本的な態度に支那を愛する氣分がなくてはならず、多少とも言語、風俗、習慣、信仰、藝術に就ても理解をもつてゐることが肝腎と思はれる。片田舎や山奥に入り仕事をするのは、要は氣力の問題であり、氣質の問題であり、體力の問題であり、粘りのあるなしの問題でもある。どんな苦しさでもたとへ匪賊に遇つても一つの行の修業であるといふ心構へでゐることが必要である。人にもよることだがあまり危ないと思はぬ方がよろしい。事故のあるときは支那人でも遭ふ。日本人に限つたわけではないのである。山寺の如きは山中における一つの自治體なのである。たとへ政治がどう變らうと、革命が起きようとそれに關係なく悠久な存在として續いてゐる。さうした山寺から山寺を巡る心構へで歩くならおのづから心にもゆとりが出來、人からとかくの事を言はれることもなく又利害の衝突をすることもない。

保護色の採用　身邊の扮裝は形を以て心を抑制する方法に資するのであるが、又形をなるべく支那氣分に漾ふ心と相調和せしむることが何より肝腎であると思ふ。

支那服といへばコムマ以下のものゝ樣に斥けたり優越感をもつて支那服を侮るのは誤つてゐる。支那の奥地に入り、民衆と共に起臥せんとするには成るべく目立つ身なりを避け、

終始保護色を採り入れるのを便とする。たとへば

1　顔の洗ひ方であるが、顔の方を動かし、手の方は浸したタオルをもつたきりである。

2　墨を磨るには**の**の字式にすり、日本のやうにせぬ。

3　ものを數へるとき、「九」は人さし指を折りまげる。日本では手辯の悪いことを示す恰好に當る。

4　食事のとき箸は卓上に直かにおく。日本式に枕させておくことはせぬ。

これらの點に就ても細心な注意を要する。

奥地送金　旅先は金錢次第といふこともあるが、支那の奥地旅行は、必ずしも金錢の問題ではない。武器とか、金錢とかに考を集中すると却つて危險を呼ぶ。そのために目をつけられるのである。若しあまり金を携帶してゐるものは上海なり、北京なり、武漢なり、然るべきところへ預けて置くに越したことはない。或は個人商店で取引のある他省の商店に行つたとき受取られるやう出發のとき個人爲替を組むがよい。支那商人間の信用は堅く、うさん臭い聞きただしもせず二百圓でも三百圓でも渡して呉れる。

女人墨客のもつ風流味などは努めても出來ぬ人もある。然しながら勉めて民心の把握に

心がけ、相手に就て無言のうちにその面子を立てゝやりながら双方その思ふところの氣持に潤ぎつけることなども大切である。

やゝもすると日本人は日本人らしく見識ぶつてしまふことはありがちなことだが、一度片田舎にでも入るとかうした些細なことから誤解やら嫌疑やら流言やらで間違ひを起す。要は老朋友となり、好朋友となり、心と心を打明けられる友を作つておく事がなによりの秘事である。

第二章　應接の心得

1. 支那人に接する心得

民心の機微は必ずしも三民主義とか、新民主義とかいふ國家の表面だつた題目の下に呼び掛けんとする抽象的な文字で動くものではない。むしろ時代の浪の勢ひとか、政策の力とか、これを主唱する人物の氣魄、實力、人格に依つて、卜せられるものとみられる。指導原理は國家社會の大綱を樹てる上に是非とも必要なものであることは固よりだが、

實際問題としては更に純理以外に支那民心の奥深く流れる民心の機微を忘れてはならない。

理財尊重　支那人が理財を尊ぶのは、支那の國情に依るのである。支那の如く、政權の變動、治亂の興亡常なき社會狀態にあつては、政府に賴ることは出來ぬ。元來、政府と民衆とは無關係であることを知つてゐる。そこで自らを護るため、コツ〳〵と溜めておくの外ないのだと信じてゐる。支那人の理財尊重の考へ方や、財神參詣の考へ方は、こゝから出發してゐるので、徒らに守錢奴とのみ評すべきではない。

延命長壽　また延年長壽を尊ぶ人情には、いづれの國でも變りはないが、とりわけ支那ではこれに支配された考へ方や、習俗が多い。正月の佳節に百壽の易文であるとか、人壽百歲の古文龜甲文字であるとか、又西王母に因んで齡三千年の蟠桃の買物であるとかいふものを贈つたり、瑞鹿白眉翁の賀軸の贈物が喜ばれてゐる。氣の早い人は男子が生れると喜びの印として、延命益壽などと云ふ古い句を今どき胸の飾りものとして祝物に贈つてゐるのもある。また壽星と稱して不老長壽の神を祀つたりして、藥屋の看板にこれが使はれてゐる。かやうに鹿(祿)と蝠(福)と壽老人の組合はされた圖案が凡ての瑞祥の限りを盡したものとして喜ばれてゐる。人に依つては、こちらの顏を凝視て、顏に四五本の切込み深

き皺があるのをみて、「あなたは長壽の相がある」などと挨拶をする。

面子の扱方　支那人が色々な場合に、色々な意味に、面子といふ熟語を好んで使ふことは、改めていふまでもなく廣く知られてゐるが、仲々理解され難い。なんでもないことのやうでも、相手の顏をつぶす態度があると、徒らに不和を深めることになる。これに反し、こちらから「あなたの顏を立てゝ」とか「私の顏に免じて」などと衆人の中で相手の顏をたてゝやれば、たとへ犧牲を忍んでも折れて來ることさへある。體よき拔道をつくり、そこに隱れられるやうにすれば、話はおのづからつくのである。

儒教より實利宗教　支那の民心を支配してゐるものは、孔孟から出てゐる儒教思想かの如く、一般に考へられてゐるが、孔子廟などは人のおとづれるものもなく、多くは草蓬々の態である。これに反して、財神廟、關帝廟、娘々廟、藥王廟、龍王廟といつたものは、常に參詣人の跡を絶たず、いかに民心の尊信を集めてゐるかが判る。これらはいづれも深き教義に基くものに非ず、財產の神とか、藥王とか、雨を降らす神とか、直接實生活の上に利益を齎すものばかりである。かゝる信仰は驚くほど深く民心に喰入つてゐる。

以上は主として民心の機微な動きの中軸となつてゐるものであるが、かくの如き支那人

の心理を理解すると共に、支那人に接する態度に於ても亦省みるところがなくてはならない。

隱忍の强さ　從來やゝもすれば、日本人は優越感を振りまはす傾きがあり、一部の識者はこれを以つて百害あつて一利なしと達觀してゐるが、一般にはさうではない。心構への優越感は恐しい油斷の氣を意味するものである。支那人は時に龜の如くをとなしく隱忍、以つて三百年でも沒々として、その損失を取返へさうとする。かゝる氣質を承知してゐるべきである。同時に、優越感そのものは、必ずしも最後の勝利者たらしむるものではない。

エヂプト亡びアッシリア、バビロニアなき世界の歷史を大觀して來るとき、獨り支那が五千年の文化を傳へてゐる。その態度には、自ら悠々五千年の間何事か成らざらんといふ氣持が現はれてゐる。支那人に接し、事を共にせんとするときは、こちらがシビレを切らす場合のみ多くして、支那人はいつも悠々迫らず、ために我々は寸前の功を急いで大局を失ふ恐れがある。

不得要領　支那人は日常生活に於て、物の黑白を即決することなく、曖昧にすることが多い。

要は大勢を見て、順應せんとするのであるが、極めて不得要領の中に事を處す。これを「馬々虎々的」と云ふ。物のケジメをはつきりつけないと氣になるといふ心構へでゐると、とかく話がうまくゆかぬ。最後に支那人に會ひ其の事業を觀る心得を述べてみよう。

應待の心得　近時惡傾向の一は外國人を親日、排日の二種に區別し、排日人種、親日人種と云ふ二人種あるかの如く言ひ囃して往來の外人を悉く其の何れかの範疇に入れんとする事である。この色眼鏡をかけ先入觀を懷いて人に對するときは一言一行穿違ひの連續となり誤解の種となる。此方の希望通りに感じ、好み通りに言はざればとて直ちに之を排日と斷じ、先方自身の判斷が偶々此方の考へと一致して先方が卒直に之を發表したるを觀て手前勝手に驚喜し、親日の印をその額に捺して之を讃へんとする如きは淺慮にして浮虛甚だ愧づべき至りである。況んや多くの日本を愛する人々は其の日本を愛するの故を以て、却つて之に苦言を呈せんとする者なるをや。親日排日の色別けは潔く撤廢する事。

群魚主義をやめる事。群魚主義と云ふのは某老大家の造語だが面白い言葉である。なるべく多勢繋がつて互に他人をたよりにしながら共同訪問をするのを言ふ。事情已むを得ぬ時の外は此方式の訪問は避けるがよい。已むを得ず共同訪問をする場合はなるべく事前に

打合はせて大體の質問乃至視察事項を纏めて置く事。訪問は少數の心の合つた友人が充分に先方の都合を聞合せて約束の時間を違へぬやうに往き、迎へられた以上は下手に遠慮せずに淡白に話すがよい。なるべく自己を表現するのが善く、遠慮勝ちに沈默してゐては一辯あつて油斷のならぬやうに謬り觀らるる虞あり、この點邦人の最も拙なるところ故平生から心懸けておく事。話が盡きたならば早速に暇乞ひをする事。用事が濟みながら無意味に長居をする事は最も禁物である。

妄りに說客たらんと試みぬ事。明治初年以來、所謂志士の支那に往來する者、時に或は說客氣分を脫せず强て紹介を煩はして名流を訪ひ會へば輙ち時事を談じ國勢を說いて慷慨悲憤眉を軒け腕を扼して咄々人に迫るの語を爲す者寡くなかつた。御本人は自己陶醉してよい心持ちに收まつたであらうが、實はそれは田舍漢の獨り合點であり先方では有難迷惑であつたであらう。岡鹿門程の名士でも其明治十七年より十八年にかけて南北支那を周遊し洋服の今ほど普及せぬ時代とは言ひながら勇敢に和服で推廻して到る處名流巨公を訪ひ、西歐の東洋に對する帝國主義を憤り支那の改造を說いて氣燄甚だ揚つたが、先方では先生が庶幾する程歡迎せず其の歡待は寧ろ儀禮上の事に過ぎなかつたやうである。支那に在

る西洋人を訪ひ卒然として「天下何れにか定まらん」流の問答をするのは避けるがよい。假令話のはづみでさういふ談話をしたとしてもそれは單なる茶話以上に受取らぬ事。

2. 支那人使用人に對する心得

支那人使用人に對する心得として、先づ知つて置かねばならぬことは、支那全民族を通じ、また支那人のあらゆる階級を通じて存在すると思はれる民族性である。共通に存在すると思はれる民族性の第一は彼等の尊大性、第二は極めて粘り強いこと、第三は時として全然捨て身になり得ることである。

使用人の尊大性　使用人として働いて居る支那人は使用人たる體面即ち「面子」を保つて居る。體面を保つといふことは、決して彼等の態度が不遜であること意味するのではない。また傲慢であるといふのではない。その反對に、表面上は謙遜であり、また調和的でもあり得る。

尤もこれは其の人間次第であるから、必ずしも謙遜であり得ぬこともある。けれども彼等の大多數は調和的である。また使用人と雖も、その人間の教養相應、辭令に巧みである。

その上、愛想の好いのが普通である。

このやうに謙遜であり、調和的であつて、その上愛想の好いのをそのまゝ正直に受け取ると、飛んでもないことになることもあるし、また案外な感に打たれる場合が無いとは限らぬ。さればといつて、この謙遜で、調和的で、愛想の好いこと、それは全然政略的のもので、何か成心がありそれで使用人としての利益を得ようとするのだとばかり考へるのも、決して當を得た觀察でない。要するに、使用人として、彼等は相當の體面を保持して居ることを十分承知して置かねばならぬ。

使用人の粘り強さ　非常に粘り強く、一旦斯うと見込がつけば、飽くまでも其の目的を達しようと思ひ、中途でこれを投げ出すことをせぬといふ彼等の民族性は、或る場合には善意に働く。また場合によつては、惡意にも働く。善意に働く場合にはとても他に類例を見出し得ぬやうな、國境なぞ全然超越した美德を發揮する。その爲め、世にも稀な忠僕となり得るのである。

現に斯う云ふ實例がある。日支合辨の或る會社の重役をして居る日本人が、厨子即ち料理人として、久しく使用して居た支那人が非常に忠實に働いて、ために互に捨て兼ねるや

うになつた。然るに會社の仕事の都合で、その家の主人が一時日本に歸ることになると、その支那人も是非主人と共に日本に行きたいと云つて承知せぬ。主人もまた此の使用人を手離すに忍びなかつた。斯うして此の支那人は、主人と共に日本に來て久しく忠實に働いたのであるが、その内に、主人がまた支那に行くやうになつた。するとまた主人と共に支那に歸り、目下この支那人は同じ此の日本人の使用人として上海に住んで居るのである。この支那人は死ぬまで、この日本人を主人として事へるのだと云つて居る。これは、使用人としての支那人の粘り強い性質そのものが善意に働いた一例である。が、この反對の場合だと、その粘り強さの結果として、恐ろしい事相を招來することすらあるべきは、極めて當然であるから、大いに注意せねばならぬことは云ふまでも無い。

使用人の捨て身　第三の捨て身になる場合の極めて簡單な一例をいふならば、例へばその支那人使用人が、何か器物を破壞したとする。故意では無論なく全くの過失である。その場合、日本人使用人ならば直ぐに相濟みませんでしたと、その心中は兎に角、口先からは直ぐ出て來るのである。然しながら支那人の場合、殆んど絶對にこの相濟まぬと云ふことは口に出さぬ。若し其の過失を追及でもしようものなら、ますます捨て身になる。自分

の過失でそれを破毀したにも拘はらず、その器物が自然に落ちでもしたやうなことまで云つて辯解し、全く捨て身的になり、粘り強さゝへも加はつて來て、一歩も讓らぬのである。斯うした事例は、器物破毀の場合ばかりではなく、何か買ひ物をさせたりした場合でも同樣である。この買物をさせた場合、支那人使用人は所謂足駄を履くのが常である。しかも仲々上手に足駄を履く。さうして主人の買ひ物で、自分の懷中を肥すことをする。それが何かのことで暴露する。すると、直ぐに捨て身になつて終ふのが彼等の常態である。若しそれがために解雇されたため、その日の生活に苦むやうにならうとも、更に意とするでは無く、全然捨て身になり得るのである。斯うした支那人の著しい特性を、先づ能く理解しないでは、到底支那人を使用人として巧みに使用する處か、普通にも使用することは難かしい。

斯うした點で、主人たる日本人が心得置くべき點は、まだまだ種々ある。が、この邊に止め、その他の點に於ける支那人使用人に對する心得を次に述べよう。

それは一般に、清潔に對しての鈍感さである。されば、清潔觀念を持たせるやう、上手に敎育しなければならぬ。彼等の尊大性、粘り強いこと、全然捨て身になり得ることなど

を念頭に置き、彼等が妙な反感を起すことの無いやう十分注意して教育せぬと、思はざる結果を起さないとは保證出來ない。

支那人使用人には、また子供好きなのが多い。この子供好きも善用すれば良い結果を招來するが、その反對の場合もあることを念頭に存する必要がある。即ち、それが爲め自分の子供がスポイルされることが無いとは限らぬから、この點頗る注意が肝要である。

それから支那人の家庭と、日本人の家庭とは大分に差がある。その差違を一應心得て居て支那人使用人に對せぬと、お互に疑惑や誤解を生じ易いことを思はねばならぬ。と共に、日支人の習慣にも大分開きがあるから主人側も好くそれを了解して、使用人を使ひこなさなければならぬ。

3. 西洋人の支那人待遇方法を見よ

明治四年七月日支修交條約の締結以來、邦人の支那に赴くもの無數、數旬乃至數十旬に亘る大旅行を試みて、立派な漢文の遊記を遺した竹添井々（棧雲峽雨日記）岡鹿門（觀光紀遊）山本梅崖（燕山楚水紀遊）諸先生の如きもあり、邦文の北支那紀行を著した海軍

省の曾根俊虎の如き異色の者もあつたが、其の頃は總じて在留西洋人との交渉も甚だ寡く、たまたま横眼で觀察してゆくに過ぎぬものが多かつた。しかも西歐人の支那に於ける事業は年と共に發展し、其の在留民は概して社會上の地位高く、信用もまた篤く凡ゆる事業に關して、勢力を張つてゐる。經濟活動はもとより、教會關係の施設だけでも布教、教育、醫療、慈善の諸方面に亙つてゐる。されば過去の旅行者のやうに徒らに西洋人を白眼視し、其の人及び其の事業に對し敬して遠ざくるの態度を執る事なく、これに接し彼を知り己を知るに努むべきである。たとへば、支那人に接する態度にしても、邦人の學ぶべき点が多々ある。

先づ邦人の缺點が何處にあるかを觀ると、それは邦人が暴君となり得ざるに關はらず常にお世話やきであることである。善意の惡政といふのはこの事である。自給自活、爲政者のお世話には預らぬを誇つた太古の自然人から、後にはわざわざ權力者の前を避けて自ら高しとした高士も出た。すべて命令干渉の埒外に出るのを望んだものである。お世話やきに出遇ふのを一番恐れたのである。殘念なことには邦人はおせつかいである。神經質である。自分が正しいと信じる前に先づ人の事が氣になつてならぬ。それが命令權を持つに至

ると命令の形に於てお世話やきを始め出す。手離しておくのが氣になつて成るべく手近に置きたがる。手近に置けば風俗習慣の上から首肯し難いと思ふ點が眼につき出す。矯正しようと思ひつく。不自由な言葉で說諭を始める。先方ははいはいと聽いて居る。實は何も分らず分つた所で從ふ氣は無いのである。勿論何日までたつても矯正などは思ひも寄らぬ。舊態依然に業をにやして、はいはいひながら改めないのはけしからぬと怒り出す。すべて此方の謬りである。先方には先方の生活がある。先方の生活が此方の生活に入込んで、生活がかき亂されぬ限りはお世話やきをしない事。この點西洋人殊に日露戰爭前後の露國人は邦人とは正反對であつた。彼等は暴君であり得た。又事實暴君であつた。しかし世話やきでは無かつた。彼等の生活に入り込んで假令生活改善の爲と云ふ善意の意圖があつたにもせよ煩鎖な指令などは出さなかつたのである。近頃出た林語堂の The Importance of Living は評判の名著だが全篇支那生活の豐富で餘裕のある事を讚めたものである。明治十七八年支那覺醒の大志に燃えて南北支那を遊歷せられた岡鹿門先生さへ「此地の生活は豐富だ、例へば三度の食事の際ですら皿數も多く分量も多い。但し之は支那人士の手許が豐かなのだから必ずしも贅澤なのでは無い」と謂つて居られる。彼等の生活を尊重せよ。而して無用

のおせつかいをやめよ。

西洋では召使ひも自分の部屋を貰ふ、自分の時間を貰ふ。支那は時間の點こそ不正確であれボーイ部屋のあることは西洋流である。自分の部屋だから室內での生活は自由である。この觀念と習慣は支那と西洋、はじめから一致する所があり習はずして相犯さない。私室での生活には大體干涉した方が負けである。作り話ではあらうが列女傳を觀ると大賢孟子も私室尊重觀念が足りなくて例の賢母に叱られて居る。孟子が或る時案內も無しに夫人のお部屋に這入つた。夫人は何の理由であつたか寬ろいで双肩を脫いで居た。肩脫ぎの不行儀を見た亞聖孟子は、顏色を變て母の許におもむきき夫人の離緣を訴へた。賢母は流石に冷靜にそれはどうしたわけかと尋ねた。一伍一什を報告すると、賢母は容を改めて過は孟子の方にある、夫人に咎は無いと言渡した。それは夫人の私室での出來事である。私室なら隨分肌を脫ぐ事もある。私室の戶を開くに何故案內を請はない。無斷であけた方が惡いのであつて內で肌を脫いでゐた者に罪は無い。離緣など以ての外、こちらからあやまるべきだと云ふのであつた。大賢孟子勿論少年斷機の時同樣一言もなく恐れ入つた。孟母に叱られる者は西洋人では無くて日本人である。

西洋人の毎日の生活は大體に於て規律が立つてゐる。だらしの無い所が少い。そういふ所は使用人には見せないのである。邦人は違ふ。衣食住のことから時間の觀念に至るまでだらしが無い。そういふ所が使用人の陰口に上ることが多いのである。だらしの無い所を見せぬ事。

第三章　在留心得

1. 衣•食•住に對する注意

鄉に入つては鄉に從へといふ諺がある。日本人は兎角、獨特の習慣に執着し、それを改變することを好まないが、一歩足を海外に踏み出し其處に住む以上、この鄉に入つて鄉に從ふの諺を全面的に實行する方が、いろいろの點で便利である。

服裝上の注意　服裝に就ても、支那に於て生活する以上、支那服を着るのは便利な點が多い。既製品の支那服はいくらでもあるから、經濟上からも結構である。

しかしながら支那服を着るのには、やはり支那人の習慣がある。これを無視して、木に竹をついだやうな着方をすることは、反つて譏りを招く結果にならぬとも限らぬ。

殊に注意すべきは、夏冬とも肌を露さぬことで、この點和服に就ても亦然りである。日本では、裾から素足が露はになつてゐても平氣である。更に胸をはだけてゐてもさして意に介しない。甚だしきに至つては、尻まくりをする者もあるが、こういふ光景を目擊した支那人は、極めて異様な感じをもつのである。「日本服は輕便で好いものであるが、隨分失禮なものである」と心ある支那人は批評する。

尙、支那は大陸的であるから、この氣候の變化に準じた服裝上の注意が必要であることは云ふまでもない。其の上概して大陸的、乾燥な土地が多く塵埃も日本より多い。この點をも念頭におき、服裝上の注意を萬全ならしむべきである。

日常食料の注意　日常食料のことに就てもまた如上と同樣のことがいへる。米、味噌、醬油の類まで日本のものを用ひずとも、その使用法に依つては支那產のものと雖も、結構使用に適するものもある。野菜類に至つては、むしろ優れたものがある。また其の種類こそ、多少差はあるものゝ、中支那に於ては魚類も豐富である。

肉類、果物、茶などいづれも地方地方でいろいろ特色のあるものが得られ、日本人の口に適するものが多い。また、支那に住む限りに於て、支那獨特のものを用ひる方が衞生

上好い場合もあることを考へなければならぬ。

居住に關する注意　支那家屋といつてももとより一樣ではないが、概して小手まわしに住まふことが出來にくい。最も普通な邸宅でも、通常二重に門があり、家屋は、二棟、若しくは三棟で、「或は凵の形に建てられてゐる。家族が多いとか、または交際が廣く、人の出入が頻繁な家庭であると、更に凵のやうな形に建てられてゐる。かうした四つの建物で四方から圍まれた中央の空地が、院子即ち庭になる。

以上述べたところに依つて既に明かなやうに大家族主義に適した建て方であつて、我々の住み好いやうに改造するには種々な考慮が必要である。

支那家屋の床や、院子は原則として煉瓦の一種を敷き詰めたものが多く、室の設備も日本式の生活に適するやうに設計されてゐない。また、純支那式家屋には便所なるものの設備は元來なく、それぞれの室に便器を備へつけ、各自がそれで用を便ずることになつてゐる。しかし最近の建物では、これらの點に就て洋式の設備を施したものもある。

今日でも支那邊疆には、穴居の人々も存在する。穴居ではないが、殆んど穴居に近いと思れる全然泥で出來た家屋に住んで居る細民が、都會の近くに存在する。支那家屋の多く

は、概して泥と木と紙とで出來上つてゐるものといへる。隨つて雨量の多い頃には勢ひ、濕氣るのである。いふまでもなく、海外に居住する者は、該地の當局者、官公署に屆出をする必要がある。

2. 支那語の學び方

支那語の種類　支那語は、言語系統からいへば印度支那語系統に屬し、形態上から見れば孤立語であるが、何といつても數千年の歴史を有し、亞細亞大陸の東半大部分を占め、人口四億と號稱される一大邦國たる支那に於ては其の言語の種類は、内容的に見れば洵に多岐多樣である。それ等方言の相異に至つては、甚だしきは外國語と同然の感を抱く程のものさへもある。而してこれ等の方言も、殊に東南の沿海地方に於ては非常に異つて居るものが多いが、この地方を除いて支那本部の約五分の四に亙つて「官話」が通用してゐる。この「官話」の「官」は、「公」又は「普通」と云ふ意味で、從つて「官話」は普通語と解すべきものである。この「官話」は又各地に於て種々話される方言に分たれるが、結局は同じ系統に歸屬するものであつて、相互間に於ける差異は甚だしいものではないのである。

この「官話」の中に於て、全國的に一般に廣く使用されてゐるものは、組織立ち洗練された優美な北京語である。北京は久しきに亘り首都として政治文化の中心地となつてゐた關係上北京語は都の言葉として最も勢力を有し、基準的言語となつて居り現今に於てはこの北京語が標準語として制定されてゐて、我國に於て支那語といつてゐるものはこの標準語―北京語である。一時盛に用ひられてゐた滿洲語なる名稱は、滿洲國獨立以來、中華民國と國家を異するといふ點から使用された名稱であつて、現今滿洲國に於て使用される言語の意味であつて、これは元來河北系に屬する支那語であるから、俗に所謂滿洲語の意味は結局支那語と同意語である。併し嚴密な意味で言語學上に於ていふ滿洲語（沽人の祖先が話してゐた言語）は漢字に非ざる一種の音標文字であつて、もはや死語となつてゐるのである。滿洲事變以來我國で用ひてゐる滿洲語の名稱は前者であつて、後者ではないのである。

要するに支那語としては、標準語たる北京語を探究すれば如何なる地方に行つても有識者間に於ては充分意思の疏通を圖ることが出來、其の他の方言も、北京語を根底にして比較研究すれば、其の相異點を割に容易に把握し得て、其の他の方言に通じ得ることになる。

方言區域

北方官話	1	河北系	河北●山西●山東及び河南の北部●滿洲
	2	河南系	河南の中部●山東の南部●江蘇安徽の淮北一帶
	3	河西系	陝西●甘肅●新疆
南方官話	4	江淮系	江蘇の江北及び鎭江●南京●安徽中部の安慶●蕪湖●江西の九江
	5	江漢系	河南の南部●湖北
	6	江湖系	湖南の東部●湖北の東南角●江西の西南部
	7	金沙系	四川●雲南●貴州●廣西の西北部●湖南の西部
蘇浙語	8	太湖系	揚子江以南の江蘇浙江の一部
	9	浙源系	浙江●安徽及び江西の一部
海濱語	10	甌海系	浙江の東南部●福建の北部
	11	閩海系	福建の南大部●廣東の一部
	12	粤海系	廣東の大部●廣西の東半部

支那現代文　由來、彼此兩國は同文同種と稱されてゐるが、しかし簡單に日本文を漢文流に轉倒して見ても、それが支那文とはならない。勿論彼地に於ける現代の文語體のもの

は、經書の如き古文體より脱却し、進化し、我が國より逆輸入した取締、悲觀、樂觀、不景氣、桃色遊戯、消極、積極、手續等々我々が日常使用する言葉を盛に取入れ、之乎者也の如き虚詞も古文の如く多く用ひず、古文に比較して割に樂に讀める點もあるが、決して左様容易に了解し得るものではない。文中には多く支那語が入つてゐるから、文語體のものを讀みこなすにしても、白話（口語）を習得することが必要である。殊に國語體に至つては、文語體より遙に至難であつて、如何にクランクの素養を以てしても充分讀みこなすことは容易な業ではない。勿論日本人として支那の文章を見る時に於ては、漢文の素養のある者は、或る程度判讀し得るが、それが却つて時として非常な錯誤を生ずることがある。

今、左に文語文並に口語文の二、三例を擧げると

文語文

1　體促會主辨田徑賽改期

體促會＝體育促進會。　主辨＝主催。

田徑賽＝陸上競技、田賽＝フヰールド、徑賽＝トラック。

體育促進會主催の陸上競技は期日を變更する。

2　團長張廷弼聞訊當飭所屬之第一連暨保衛團聯合出發往勦。

團　長＝聯隊長。　聞　訊＝消息を聞く。

當　飭＝直ちに命令する。　第一連＝第一中隊。

暨　＝及び。　保衛團＝自警團。

往　勦＝討伐に行く。

聯隊長張廷弼は、消息を聞いて、直ちに所屬の第一中隊及び自警團に、聯合出發して討伐に赴くやうに命じた。

3　曹氏已於十九日親臨郵局視事正式接收現已立見起色刻國內匯兌及包裏業已開辦

已　＝すでに。　親　臨＝自ら臨む。

郵　局＝郵政局（郵便局）　視　事＝事務を執る。

接　收＝引繼ぐ。

立見起色＝たちどころに景氣づく、起色＝景氣づく、活氣づく。

刻　＝目下。　匯　兌＝爲替。

包　裏＝小包。　業　已＝すでにすでに、既に。

開　辦＝取扱ひを開始する。

曹氏は既に十九日に自ら郵便局に出て、事務を執り、正式に引繼ぎ、現在はすでに立ちどころに活況を呈し、目下國内の爲替及び小包は、既に取扱を開始した。

口語文

1　傻狗只得站住二人就摘下草帽子來墊着打地灘兒

傻　狗＝のろまの犬（あだ名）　只　得＝止むを得ず。

站　住＝立止る。　就　＝そこで。

摘下來＝脱ぐ。　墊　着＝敷く。

打地灘兒＝地べたに坐る。

のろまの犬は、止むを得ず立ち止つて、二人は麥稈帽子を脱ぎ尻の下に敷いて、地べたに坐つた。

2　若照這麼麿一道兒到了准安不用說騾子也幹了傘們也賠了

照　＝。。。。の樣に。　這　麼＝こんなに。

麿　＝麿蹭—ぐづぐづする。　一道兒＝途中。

准　安＝地名。　不用說＝云ふに及ばぬ。

騾　子＝騾馬、馬と驢馬の雜種。　也　＝。。。も。。。もまた。

幹　了＝壞了＝いたんでしまふ。　眼目になつてしまふ。

傘　們＝御互ひ。　賠　了＝損をしてしまふ。

若しこんなにして、途中ぐづぐづして行つたら准安に着く頃には騾馬もいたんでしまへば、御互ひに損をしてしまふことは知れたことだ。

3　白臉兒狼說這話可法不傳六耳也不是我壞良心來兜攬倆因爲咱們倆是一條線兒拴倆螞蚱飛不了我逃不了俤

白臉兒狼＝白顏の狼（あだ名）　說　＝云ふ。

這　話＝この話。　可　＝併し。

法不傳六耳＝二人丈で内密にして置いて第三者に知らせぬ。

也　＝また。　不　是＝、、、、ではない。

壞　＝こはす。壞良心來—惡心を起す。兜　攬＝引摺り込む。

因　爲＝、、、、の爲に。　　咱　們＝儂們—御互ひ。
是　　＝、、、、である。　　倆　　＝二つ、二人。
一條線兒＝一本の紐。　　拴　　＝縛る。
蠣　蚱＝ばつた。　　飛　不了＝飛べぬ。
迸　不了＝飛べぬ。　　俤　　＝お前。

白顏の狼が云ふには、この話は併しながら二人丈で内緒にして置いて外の者には云へないのだが、きうかと云つて俺が惡心を起してお前を引摺り込むのではないぞ。御互ひ二人は一本の紐で二匹のばつたを縛つた樣なもので、俺も飛べなきやお前も飛べぬやうな離れられない間柄だから（お前丈に云ふのだよ）。

以上は現代支那に於ける文語、口語の二文體の例を擧げたのであるが、中には文語、口語混淆の雅俗混同の文體も行はれてゐるが、右二文體によつて、由來我國に於て所謂漢文と稱せられてゐるものとの相異を或る程度察知し得られることゝ思はれるが尙左に現代の文語文（我國に於て所謂時文と稱するもの）と口語文とを比較對照すれば、

（文語文）　津市河北大街長順和瓷店昨晩七時半突不戒於火延燒房屋四十間至九時半火始

媳滅損失尙不知其詳細聞該舖保有火險二千元

（口語文）　天津河北大街長順和瓷器店昨兒晩上七點半鐘突然失火延燒的房屋有四十間趕到九點半鐘火才滅了損失還不曉得詳細聽說那舖子保有火險兩千元

（譯　文）　天津市河北大街の長順和陶磁器店は昨夜七時半突如出火し、延燒家屋四十間、九時半に至りやつと火が消えた。損失は詳細未だ不明、該店は火災保險を二千元掛けてあるとのことである。

現代の文語文は、新聞雜誌の記事論說、公文書、書翰文、契約書等に用ひられ、口語文は、小說、小新聞、論文、文藝物、學生間の書信等に用ひられてゐる。これは劃然と區別を立てた分類ではないが、大體の傾向は如上記の通りであると心得て貰ひたい。

支那語と日本語の相異　彼此兩國間に於ける類似語は例を擧げる必要もなからうと思はれるが、同字異義に就ては例を擧げて御參考に供して置く必要は多分にあることゝ思ふ。これも全部網羅する譯に行かないから其の點御諒承を願つて置く。

（東洋）　最近は東洋の意にも解されるが、一般には廣く日本を指していふ。

（花子）　日本に於ては婦女子の名に用ひられるが、彼地に於ては乞食

（浪子）　右同様日本に於ては婦女子の名であるが、彼地に於ては放蕩者
（汽車）　日本に於ては汽車であるが、彼地に於ては自動車
（火車）　日本に於ては、火の車が廻るといつて好い意味に用ひないが、彼地に於ては汽車の意となる。
（顏色）　彼地に於ては曹通、單に色として用ひ、顏色は氣色といふ。
（表）　表、表すと云ふ意味は彼我兩國同樣であるが彼地では尙懷中時計、メートルとなる。
（狐狸）　狐と狸に非ずして單に狐
（野猫）　野良猫に非ずして兎
（香煙）　卷煙草
（東西）　品物
（大夫）　醫者
（姑娘）　姑と娘に非ずして娘
（丈夫）　夫の意

（工夫）　暇、時間
（舅舅）　伯父（母の兄弟）
（絲）　單に絲に非ずして絹糸
（牙）　廣く齒として用ふ
（親友）　親友に非ずして親戚朋友の意
（二百五）　二〇五に非ずして二百五十の意。十を省略せるものにして足りぬ者と云ふ意。二〇五は二百零五といふ。
（肉）　單に肉といへば彼地に於ては豚肉を指していふ
（卵子）　卵子に非ずして睾丸の意
（兄弟）　兄弟ともいひ弟の意。尙兄弟は、（弟兄）といひ、弟が僭越にも兄の上に位置を占める
（兩便）　途中に於て同行者と分れる場合の挨拶語として用ふれば、左樣ならの意となる
（圖書）　圖書の意もあるが、印形の意として多く用ひられる
（行李）　荷物の意

（馬桶）馬の飲み水を入れたる桶に非ずして便器
（湯）普通に湯として用ひず。スープ、汁の意
（猪）猪に非ずして豚、猪は（野猪）といふ
（起身、動身）共に單に身體を起したり、動かしたりするのではなく出發する意
（産業）産業の意もあるが、普通は主として不動産に用ひられる
（利害）利の字にアクセントをつけると、烈しい、ひどい。害の字にアクセントをつけると利害
（活）活きる意もあるが、名詞となれば仕事にもなる
（合同）契約書の意
（告白）告白に非ずして廣告
（時候）時候に非ずして、單に時
（早起）早にアクセントをつけると朝。起にアクセントをつけると早く起きる意
（槍）槍の意もあるが（鎗）に同じく銃
（約束）普通多く、取締る、束縛するの意
（告訴）告訴に非ずして告げる意
（菜）菜の意もあるが、普通菜といへば料理となる

（菓子）菓子に非ずして果物
（新聞）彼地に於ては珍聞、ニュースの意
（下落）行衛
（困）口語にてねむくなるの意
（走）口語にては普通單に、歩く意に用ひ、走るは（跑）を用ふ
（一點）少し、一時（時間の）
（多少）多少ともなるが、いくらの意に多く用ひられる
（老）老ゆる以外に、口語としては、久しく、かたい、いつも等の意として用ひられる
（交代）引繼ぐ、話す、始末する、渡す意
（實在）口語にて、本當に、着實の意
（打算）助動詞になれば、……する積りの意
（馬上）副詞としては、直ぐに
（他）口語で（他）は第三人稱代名詞となり、男女の性別を問はず用ひられる。彼、彼女
（本家）父方の親戚、同姓の親族
（親戚）母方の親戚
（姪兒）姪の兒に非ずして甥

（清楚）明かなる。明瞭
（外人）口語に於ては、外國人に非ずして他人、見知らぬ人
（土）土が土としてでなくホコリとして用ひられる場合が多い
（借）借りるのみと限らず、貸す意共兩樣に用ひられる
（寫）口語にて書く意として用ふ。從つて（寫字）は字を書く意
（聞）口語に於ては主として嗅ぐ意に用ひ、聞くは聽といふ
（乏）缺乏として用ひる場合もあるが、口語に於ては疲れる意として用ひられることが多い

第四章　宗教と秘密結社

1. 基督教徒に對する心得

基督教徒も支那人である。他の支那人と同じやうに思想し、生活する。基督教徒を善くもあれ惡くもあれ特別扱ひせぬことである。

舊教　但し新舊二教それぞれ傳承の機構あるにより信徒の思想と習慣にも多少の相違あ

り。基督教は元來唯一神の信仰を基礎とし偶像崇拜を絶對に排斥するものながら、明末神宗の時入燕せし利瑪竇（マッテオ、リッチ）の如きは、渡來最初肇慶に在りし間は佛僧の衣裳を着け土語を習つて市民の教化に努め、後には又僧衣を脱して儒服を纒ひ南京に至るや專ら其の他の大官と交りを結ぶことに骨を折り、既にして入燕布教するや支那在來の思想慣習を斟酌して敢て異を樹つることなく、之を基督教教義との妥協調和を圖つて支那信徒が風俗を守つて祖先を祭祀禮拜し孔子の神位に稽首する事などを咎めなかつたが、是等耶蘇會士の競爭相手として來支したる他派のカトリック宣教師は之を咎め一致して羅馬法王に訴へるに至り、法王クレメン十一世は康熙四十三年教書を下して支那在來の祭祀は偶像崇拜に墮せるものなることを宣告し、苟も耶蘇教徒たる以上は之を習合することを嚴禁した。即ち祭天の儀令も之を認めぬこととなつたのである。この諍議は一方法王と康熙帝との論爭となり他方宣教師と支那官憲との間、更に延いては宣教師相互の間に複雜なる問題を生じ所謂典禮諍議を釀成した。諍議は乾隆朝まで持ち越されたが、其の前代の雍正朝では基督教の傳道は禁止の方針となり開國の時にまで及んだのである。この諍議の根底に横はる思想問題にはカルターゴ教會に於て大成したる賤外排外主義と制度の上に於ける羅馬教會の

中央集權制度と傳道諸團體の統制と云ふ問題があつた。そして此の傳承は今も壞れず、舊教はすべて羅馬法王廳中心主義故この機構を離れては何をも爲さず又何をも爲し得ないのである。即ち舊教は機構の宗派であり傳統の宗派である。されば教徒も自然儀式を重んじ迷信に類する事をすら喜ぶ傾きあり階級を尊び殿堂法器の金碧燦爛たるを渴仰する。排外騷動起る毎に多く殉教者を出すは教民の數多きによると雖も亦其教への機構の故である。舊教各派は新教程に多からず、在支のものは約十二派ばかりで就中フランシスコ派、ラザロ派、ドミニコ派、ジュスイット派が知られて居る。外人宣教師約三千名教徒二百五十萬人と云ふ統計である。

新教　新教は之に反し各宗各派を統一する大本山といふものなく隨つて其の政治機構は舊教程物々しくない。苔は附かぬが小ざつぱりして、資本主義に蝕まれたとはいへ流石にまだ平民宗教の姿を存して居る。「布教事業は西歐が支那と接觸の一部面であり宗教界の狀態のみならず時の政情、經濟狀態、社會狀態等萬般の事情に影響せられて兎も角もなるものである。結局西歐の支那侵略と絡み合つてゐる事は辯解の餘地は無い。支那にも社會があり政治があり宗教があり制度がある以上支那人士の反動は當然起り得るものである」。といふのは支那布教史の著者ラッゥレットの意見であり、「多數宣教師中には其の人格の上に

多少の非難あるものが如しと雖も其の多數は支那人の蒙を啓き道を傳ふるに足るの人格識見を有し且不撓不屈の精神と體力とを持し孜々として布教に從事する結果は」云々といふのは年月はやゝ古いが漢口總領事館から外務省への報告の一節である。

又「外人の支那に來る、商界と政界に居る者多く、彼等は日々自己乃至其國家の爲に働く者なるも宣教師に至りては他人の爲に働く者なりとは支那識者間に往々聞く所の言辭にして、各國布教の目的は事實文明國の宗教を未開の境に移し改過遷善の美德を養成し、人智の進歩發展を圖り漸次文化を普及し支那を啓發して長夜の惰眠より覺醒し、世界の蒼生を一律救濟するにありて人道上より誠に美擧と稱すべきもの」云々といふは亦同報告書中の他の部分である。新教の流派は頗る多く支那宣教に着手せるものゝみにても四五十を數へ其の大抵は布教事業以外教育醫療の兩事業及び社會事業を經營する。ラッゥレットは『近世支那を知らんとせば宣教運動の理解を忽にすべからざる事を指摘し如何にして宣教事業が始まりしか、當時の西歐事情は如何、宣教事業は全然宗教事業に屬するものなりや其の根底には之を形造れる政治經濟其他の要素が横はれるにはあらざるか、羅馬舊教露國正教新教各派の入來れる事情如何、新教の宣教師が羅馬舊教より多數入込み居てしかも信徒の數は舊教

が遙に新教に勝る所以如何、ドミニコ派が福建に優勢に、ラザロ派が直隸に、ジエスイツト派が江蘇に多き故如何、何が所以に龍教宣教會は各處に足溜りを有するか、內地會派の特に優勢なる所以は如何、新教宣教師には英米人多く舊教には佛國人多きは何故なるか、一九一八年以降米國宣教師が急速に增加したる故如何、布教事業に附隨して往々甚しく廣汎なる教育及醫療事業の經營せらるゝ所以は何ぞ、宣教事業の支那に及ぼせる影響は如何、支那は如何なる程度まで基督教化したるか、支那在來の文化が如何に基督教の信仰と教會組織とを定めしむる背景となりたるか』等の諸問を呈し『支那に於ける宣教事業とはかういふ複雜なものである。輕々にドグマで判斷すべきものでも無し判斷し得られるものでも無い。西歐との接觸によつて支那は急速に變化しつゝあるといふのが眼前の僞らざる事實である。基督教が支那文化に及ぼす影響は如何。これ後來の宿題である』と述べてゐるが斯道の大家の言ふ所流石に傾聽に値する。基督教宣教師の活動を橫眼に睨んで色眼鏡の結論をしておくのでは餘りに淺薄である。

信者に對する態度　そこで基督教の宣教師乃至信徒に接した際は先づ相當の敬意を之に拂ふこと。話はなるべく土地の布教狀態に止めること。土地の教會の全事業、信徒の有樣を

聞き取るのは差支へ無い。先方でも大抵喜んで話してくれる。宣教師は土地の狀況を熟知して居るから其の土地に關する智識はこの間に得られて意外の收獲となる事も寡く無い。精々尋ねて見るべしである。

但し宗教論には亘らぬがよい。役にも立たぬ事で感情の衝突を來し易い。禮拜などの事には特に立入らぬ事。近代文明の大威力を以てしてすら傳統は中々に碎き去り難い。宗教宣布の使徒ならば兎も角、普通の旅行者ならば先は觸らずに觀察だけに止めておくが無事である。

會堂には許可を得て正式の案內者が附きたる時の外は入込まぬ事。參觀の際も品物に手を觸れぬ事。

宣教師乃至信徒と話する時は布教事業以外社會事業教育事業醫療事業など大抵教會の附帶事業となり居るものに就ても質問してみる事。宗教談よりも是等の事業を話題とする方効果良き場合が多い。

事前に訪問先の事を多少なりとも取調べて出來るだけの豫備智識を蓄へ置く必要は一般心得の條にも說いたが宣教師又は信徒を往訪する場合にも此事尤も必要である。新教は特に

派別多き故今訪ねんとする先が何派に屬する位の事は是非とも知り置かねばならず、此用意を缺けば折角の訪問も何等の意味もなく畢る事寡くない。

新教では一般に Emperor—Worship を好まない。この點に關する邦人氣質の丸出しは遠慮する事。

こちらを尊敬させる事は宜いが此方からも先方を尊敬すること。對者は勿論第三者の惡口をも言はぬ事。

2. 回教徒に對する心得

回教は西歴紀元六百年代の初めにアラビヤに於てマホメット（正しくはムハマッド）によつて起された嚴格なる一神教でユダヤ教、キリスト教等の影響を受けて出來た宗教でイスラム教、マホメット教と呼ばれ、支那に於ては回々教、清眞教、天方教、伊斯蘭教等と呼ばれてゐるが、正式の呼稱はイスラーム教である。

萬物の創造神たる「アラー」（アル●ラーハ）の啓示を受けたマホメットは最高、完全なる使徒と見られる。信仰と生活との結合した政教一致の宗教で、偶像崇拜反對、戒律の

嚴格にして特殊のものを持つてゐること等が特徴である。

當時のアラビヤ及び近隣地方の社會的、宗教的頽廢傾向に應じて登場し、數十年の間に忽ち各地を風靡したのであつた。教派は大きな派別としてはスンニ派（正統派）及びシーア派（分離派）の二つの他、回教改革を目的として出來た各派等、數十派に上るのであるが、スンニ派が壓倒的多數を占め、その宗教的對立もキリスト教、佛教等に於ける如き固定的なものでなく、回教徒全体の結合力の前には宗派的對立は消滅する性質のものである。

世界の回教徒は大体三億前後といはれ回教圏と見るべき地域は西はアラビヤ、小アジアから北、中部アフリカ一帶、東はイラン地方から中央アジア、南部コーカシヤ、印度の西北及東北地方、支那の西北地域を主する省（寧夏、甘肅、陝西、青海、新疆等）及び滿洲、南は蘭領印度等（部分的には歐洲の若干の地點をも含む）の諸地域に亘つてゐる。

回教徒數 扨て支那の回教徒の數に就ては、人によつて非常に異つて見積られて居り、多きは八千萬、少きは四百萬等とも言はれるが、西北邊疆及び滿洲回教徒を含めて先づ三千萬位と見るのが妥當であらう。此等回教徒はその風俗習慣に於て又性格に於て一般支那人と非常に異なるものを持つてゐるので、これら回教徒に接する場合には特別な注意が必要

である。

回教徒の慣習　支那の回教徒は自ら回教徒であることを誇りとし「回教第一」の觀念を持つてゐる。彼等の家屋には戸口の鴨居又は門扉にアラビヤ文字でコーラン中の章句を書いて目立ち易く貼り付けてある。

殊に飲食店では必ず招牌（看板）に「西域回回」とか「清眞」とか書き、更に支那の回教徒が禮拜の時用ひる帽子や、小淨の時に用ひる水指などを書き又彫刻してゐる。斯樣にして同じ回教徒に呼びかけ、又異教徒と區別するものである。

回教徒は酒を飲まず、豚も食はず、又煙草も餘り喫はない。彼等は豚を極度に忌み嫌ふ。從つて苟も豚に就いては語る事も避けるがいゝ。彼等が異教徒の處で一杯の茶さへ手をつけないのは、茶椀に豚の油脂が着いてゐることを恐れるからである。從つて若し彼等の訪問を受けた場合には必ずしも茶菓を強ひない方がいゝ。酒も又彼等の忌む所であるが、一般に興奮し刺激し易い飲食物は避けると言ふのが回教々義の原則である。回教徒を宴席に招待する場合は必ず回教料理にしなければならぬことは勿論であるが、萬一それが回歴の九月に當る場合は、この月はサマザンと言ひ斷食月であるから、日沒後に招待しなければ

ならない。豚以外にも貌の酷く不整なもの、例へば支那料理で最も愛用する鮑、海參の如きは回教徒の避ける所のものであるから彼等を招待する場合の獻立には細心の注意が肝要である。

信者に對する態度　回教徒は異教徒にして回教を理解し尊敬して呉れるものには厚い感謝の念を抱き寺院に對する寄附金などは喜んで受ける。回教の寺院は清眞寺と總稱されるが、從來は異教徒の入ることを極端に拒絶した。

然るに近年に至つては寧ろ喜んで參觀を許す樣になつた。然しそれだけ異教徒としての注意が肝要であるから次に摘記して見やう。

一、清眞寺内では喫煙せざること
一、コーラン經その他貴重品に妄りに手を觸れざること
一、禮拜堂に入る時は先づ手を洗ひ口を漱ぐこと
一、罕指即ちメッカ巡禮の教徒には特に敬意を拂ふこと
一、回教及び回教徒に好意ある質問を試みること
一、寺院の庭内では唾を慎しむこと

一、出來得べくんば幾等かの寄附金を喜捨すること

回教徒の短所としては文化に落伍し、新知識に缺け、思想狹くして性情强暴などが擧げられるが、その反面團結力あり、合理的な教義を信仰し、例へば毎日の早起、禮拜、沐浴、淨心運動など規律的で道德堅固で冒險的精神に富み、勤勉で儉素であるといふ長所がある。

回教徒の教長に對する尊敬も依然相當强く、「回教第一」の彼等の間ではアラビア語を解することが尊敬の主要條件である。注目に價するのは漢人回教徒にしても、漢人と言はれ同一視されることを嫌惡し、實際民族的區別すべき何等の確證もなく、純然たる漢人にして宗教的存在としての回教徒であるにも拘らず、飽くまで回教民族であると主張してゐる「回教第一」主義の彼等漢人回教徒の心理狀態である。

回教徒と一般漢人との差異　以上の如く支那の回教徒に對しては特別の注意が必要であることが判るが、然らば回教徒を如何にして一般漢人から識別し得るか。以下これに就いて述べよう。

一、服裝は平服では一般支那人と同樣であるが、若し軟製椀型の白帽を戴くものがあれ

ば端的に回教徒であることが判る。回教徒は禮拜祈禱する時には必ず一種の禮拜帽を冠るか、教長その他教職に在るものは白布を以て頭部を卷く（之をターバンと呼ぶ）

一、一般の支那回教徒は六角形の麻布又は緞子製の帽子を用ひる

二、容貌はトルコ民族系統の回教徒は一般に鼻が大きいが、支那內地の漢人回教徒は識別困難である。然し彼等は成年後は腋毛を拔き髭を蓄へる。

三、支那回教徒の姓名は一般回教徒と同樣、生れるとアラビヤ語の回教名を命名され、稍々長じてから漢字名を附けるが西北回教徒は終身漢字名を用ひない。漢人にして次の姓を有するものは必ず回教徒である。

賽、納、喇、羽、哈、底、亞、鮮、喜、定、撒、薩、海、回、鐵、虎、脫、朶、閃、妥、仉、以、沐、玉、把、改、買、拜、可、者、敏、忽、靠、黑、洒、

これらはペルシヤ方面の姓を漢字化したものである。又馬、麻、宛、滿、沙、古、丁、洪、黃、白等も準回姓に「十個回回九個馬」と言はれる程馬姓に至つては一般漢人と同じで識別の手段にならない。

四、地名の呼稱は北方の何々營と呼ぶ村莊や、南方で何々坊と稱する街市は、何れも昔

から回教徒の居住した地、若しくは居住し居る地域である。

五、割禮は宗教的儀式として男童の陰莖の皮を傷けることを云ひ、この風習は回教徒以外にユダヤ教、未開人の間にも存在する。

3. 支那に於ける秘密結社

支那では昔から秘密結社がいろいろの形で存在してゐて、社會の裏面に非常な勢力を持つてゐた。歴史上多くの宗教匪はたしかに秘密結社的性質を持つたものであつた。民國革命當初の興中會同盟會の如き全く近代的性質を持つた政治的結社が生れた後、そういふ形の政治的結社を除いた外は皆悉く支那民衆の宗教生活と關係したものであつた。むしろ本來的の秘密結社は宗教信仰と契合するといふのが本當のことであらう。近代の例をあげれば白蓮教、義和拳教、哥老會、三合會等々皆この例である。支那の民衆生活の社會的形態が秘密結社を形成し、さういふ社會形態は支那の民衆宗教の地盤でもあつたのである。その宗教は何かといへば、佛、道二教が主であり、佛教にても道教的佛教であつた。その信仰する神々は關帝、司命、玉皇大帝、十王、老子、釋迦や禪宗の達磨、慧可等の祖師等

道教、佛教關係のもので、中には孫悟空、猪八戒等小説に出て來る人物や、諸葛亮等までも神格化してゐる。

白蓮教 これ等の諸結社は系譜的に連絡づけることが出來る。秘密結社は元來反社會的なものであるから、調査も困難である爲この相互關係—特に實踐運動上の連絡—は漠然としてゐるのが本當であるが、それでもこれ等の諸結社は系譜的に連絡づけることが出來る。白蓮教は單に文字の上では晋の慧遠の白蓮社まで溯り得るが、宗教匪的にはむしろ所謂彌勒教匪であつた。元末の紅巾の賊はこの流をくむもので、明、清共にこの白蓮教匪の活動に惱まされた。清代八卦教の名が傳へられたが、それはこの系統のものである。そして彼等の活動の基本である信仰内容は著しく道教的性格を持つたものである。清代の秘密結社で排外殊にキリスト教反對の運動をした有名な義和拳教は八卦教即ち白蓮教の支派と考へられる。これは後に義和團と改名し扶清滅洋の旗を揭げ、各國公使館を燒き、竟に各國聯合軍が北京城を陷落せしめるまでに至つた。義和拳はこの大亂後大刀會、紅槍會等にその衣鉢を殘してゐる。これらは山東、河南より滿洲にかけて農民の自己防衛的結社の意味で出來たものである。紅槍會の名は槍に紅い纓をつけてゐるからで、呪符を唱へ護符を帶び、

勇敢に活躍する。吳佩孚は紅槍會を一時利用して自己の勢力扶植を行つたことがある。

哥老會　次に哥老會といふのがある。これは明滅亡後組織された反清復明の秘密結社である。この會の經典は「海底」といふので、その開卷第一に「皇明の江山を恢復すべし」と出てゐる。會員相互に供家兄弟と稱してゐる。この會は反清主義であるがキリスト教に對する憎惡から排外黨にもなつた。清末孫文等の興中會と關係し民國革命を促進する一翼ともなつた。清滅亡後はこの會は反清主義の意義を失つたから單なる秘密結社となつたわけである。この會の正統は現代の紅幇であるといはれてゐる。有名な青幇はこの會の別派で大運河の漕運業從事の者の間に出來た結社である。又在家裡といふのがある。

三合會　三合會も反清的秘密結社である。哥老會と類似した目的內容を持つてゐる。會員は洪家に屬するといはれて、洪家大會を開く。洪秀全の太平天國の亂が起つた時その叛亂軍と關係したこともあつた。一般に南支に會員多く、南洋各地の華僑の中には三合會員が多い。孫文等の興中會と關係して革命運動に援助したこともある。

これ等秘密結社の中では會員間に嚴重な規則禮法が設けられてゐて、それを犯すものは罰せられた。會員になるには正式の儀式を經なければならない。會員相互の團結は家族同

様で、財を分ち產を共にする風もある。又相互間に兄弟の序を示す區別があつた。その結合の形は同鄕團體とか職業團體にも類似したものである。秘密を嚴守する爲に會員相互にのみ通用する隱語合言葉が行はれてゐる。會員間に世間の道德的規範を守らせるものもあつて、立派なものもあるが、土匪となつて竊盜するものや暗殺、密賣等をするものも多い。

青幇　支那の土匪は農村失業者の一形態であるが、それは秘密結社のあるものとは社會的に常に連りがあるものである。上海等に於ての青幇の活動はアメリカのギヤングのそれと似たところがある。これら秘密結社は社會的母體としては土匪と同じものを持つてゐる。青幇は上海を中心として中支に勢力大で、北支及び滿洲に勢のある在家裡はやはり哥老會の出で青幇と同樣內容のものである。蔣介石はこの青幇を利用してかつて共產黨を撲滅したことがある。昭和六年七月廿七日我が重光公使等を上海驛頭で狙擊したものも青幇の行爲と言はれた。

蔣介石は在來の秘密結社の組織に倣ひ藍衣社を作つた。陳果夫・陳立夫兄弟はCC團を組織した。これらは近代的な祕密結社である。それに躍らされて現時親日系要人暗殺のテロ行動を行ふ種々の暗黑面の團體には所謂傳統的な性質を持つた秘密結社もある。兎に角

秘密結社は支那の政治とは大いに關係があつた。そしてこれら秘密結社存在の社會的地盤が崩壞するまでは、舊支那社會的な秘密結社は依然として從來の如く政治的に重要な意義を持つものであらう。

第五章　支那の習俗

1. 主なる年中行事

民心の奥深く、言ひ傳へられた傳說や、民衆が喜びを共にする年中行事は、旅行者にとつて忘れ難い興味を誘ふ。まして支那に住み、支那人と事を共にする人々にとつては、その民情を理解し、親しまんとする上に見のがすことの出來ないものがある。

國が廣いので、地方に依り各々習俗を異にするが、次に主として北京に行はれてゐるものを擧げてみよう。

北京の習俗は從來舊曆で標準となつてゐる。そして多くの習俗が迷信の色につゝまれてゐるので、官邊では、屢々これを廢除しようと試みるものもあつたが、毫も効果がない。

舊曆行事　舊曆の正月一日は元旦で、今は春節と改稱された。各家庭では、數日前から

種々な飾りに忙がしく、商家では年末決算に忙殺される。一年の決算期で最も重要な時なので、「年の瀨は越し難い」と云ふ諺がある。一般の家では春聯を貼り、お目出度い文句を書く。春聯は紅い紙で、これに吉祥な文字を書くのである。尤も富める家では、朱漆の木板へ黑字で書き門に懸ける。鴻禧、接福、迎祥等の吉語を書き、舊年を去り、新年を迎へる意を示す。尙春聯の外門の上へ「掛錢」を貼りつける。

一日より五日まで多くの商家では休業し、六日から營業を始める。尤も最近では、大商店以外通常通り營業するやうになつた。

十三日より十七日まで燈節で、十五日を元節と稱す。昔時は頗る盛を極めたもので、商店、廟宇は種々樣々な畫燈をかゝげ、これに三國誌、水滸傳、聊濟、西遊記などの精緻な畫を書いた。殊に十五日の元宵は、一きは賑やかで、街巷は人の波だ。笛、喇叭、鐘太鼓の音が耳を聾するばかりである。

二月一日は雍和宮で俗に打鬼と稱し、邪を却ける意でこの月は一年で最も樂しい時である。この日は、俗に太陽生日と言はれ、崇文門外太陽宮の開廟がある。

三月三日は上巳節、春日麗かな清明節前時の郊外は非常に賑やかである。

四月八日は浴佛節、釋迦牟尼佛聖誕の日。

五月一日より五日まで、端陽節、或はまた端午とも稱す。諺にこの月は惡五月と言ひ、五善正月と對稱してゐる。

六月一日は天貺節、二十三日は馬王大神を祭り二十四日は關帝を祭る。この月は既に伏に入る。

七月七日は元巧節、七夕節である。十五日は中元節、俗に鬼節と稱し、寺院では盂蘭會を設く。

八月三日は竈君誕辰、料理人は竈をまつる。

十五日は中秋節、市街は特別の光景を呈する。各種の果物が實り、果物店が、軒をならべる。滿月が中天にかゝる頃、香堂を設け、裝飾も美々しく太陰星君、玉皇大帝、菩薩諸神をまつる。酒席を庭に設け、一家揃つて酒を飲み、月を賞するので團圓節とも云はれる。

九月九日は重陽節、重九節とも呼ばれる。九の字は陽數で、月と日に陽數が重なるのでかく言ふ。郊外は酒壺を提げ、秋色を賞る人々で賑ふ。

十月一日は孟冬。祖先を奠る。十五日、下元節。

十一月は冬月とも稱し、冬至節には餛飩を喰べる風あり、夏至に麵條を喰べる風と似てゐる。

十二月は臘月とも云ふ。四季總決算の月で、今は廢れたが清朝時代には、公官署では封印の擧を行ひ、梨園では封箱、封台などが行はれた。

新曆行事　國曆の新年及十月十日は國慶日となり、戸毎に國旗を揭げて祝す。二月十二日は南北統一紀念、二月十九日は新生活運動紀念日、三月十二日は孫逸仙逝世紀念、八月廿七日孔子聖誕日、十一月十二日孫逸仙誕辰、三月廿九日黃花崗七十二烈士紀念日、四月四日兒童節、五月一日メーデー、六月一日總理奉安紀念日、六月十六日蒙難紀念日、七月一日南京政府成立紀念日、九月九日總理第一次起義紀念。十月十一日總理ロンドン蒙難紀念日、十二月廿五日雲南起義紀念日。以上各日は國旗を揭げて紀念する。

2. 婚　葬　禮　節

婚禮の風習　新生活運動が高唱されてから、その影響を受けて集團結婚なども行はれる樣になつたが一般には依然として在來の支那式結婚が行はれてゐる。支那婚姻の特質は、

一は家族主義たること、他の一は同姓不婚である。

支那のやうな家族主義の國においては、男女當事者の相愛合意よりも、むしろ夫家の存續平和繁榮を主とし、從つて男女共に父母や長上の意志によつて決定されるのが原則である。これらの結婚風習は二千年以上も踏襲せられる間に幾多の弊害を生み、殊に下層階級には經濟的な負擔を重荷してゐるが、所謂「六禮」を骨子とした習慣が行はれてゐる。

先づ男子は成年に達すると父兄は適當な配偶者を物色し媒人を通じて禮物を贈る。これを納采（ナツアイ）と言ふ。女の家で禮物を受けると內諾を得た證據であるから續いて媒人を通じて姓名、年齢を問ふ。これは問名（ウエンミン）又は請庚帖（チンカンティエ）と言ふ。庚帖は原籍、三代以前からの祖父及び父の姓名、本人の姓名年齢を記し、年齢には生年月日の干支を明細にしてこれによつて合性を見る。庚帖を受けると双方で人を遣はし先方の家庭の樣子や當人の人柄などを調査し、それでも充分意を得ない場合は納吉或は探問占卜と言つて占卜に依つて判斷する。探問占卜が濟むと愈々吉日を選んで結納を取交はす段取となる。これを納徵（ナフチン）又は定親（チンチン）と言ふ。

定親の日、男宅は首飾（純金製、又は現金を以つて代用）及び茶、菓子、禮帖（致意、求允の二帖）を女宅に贈る。女宅はこれを受けて禮帖（致意、八字、允帖の三帖）及び喜

糕を贈る。この禮帖は主婚者及び父兄の署名を以つて、男の方からは「恭しく台允を求む」と書き、女の方からは「謹んで台命に遵ふ」と書く。

定親の後、數ヶ月或は數ヶ年の婚約期間を經て結婚の黃道吉日が双方の合意によつて決定される。結婚式前數十日或は一二日に再び賜物の交換が行はれる。男宅では豫め女宅と新婦の首飾、裝身具、衣服、禮服や現金などの高を相談し女宅に贈る。首飾、裝身具は純金又は現金、衣服は大抵綢緞で現金は數十圓から多きは數萬圓に及ぶ。これを聘禮と言ふ、これを受けて女宅では新郎の禮帽、禮靴、文房四寶、喜糕を回禮する。

結婚式の前日、女宅は粧奩（ツアイレン）即ち女嫁の持參品を男宅に持込む。粧は貧富の程度により四櫃八箱、二櫃四箱或は數箱に過ぎないこともあるが必ず朱塗金箔の釣台の上に載せられ紅綠の絹綿を絞つて結びとめる。豪華なものは箱の行列が四五町に及ぶ場合もあるが、粧の中に是非とも持つて行くべきものと決して持つて行つてはならぬものとある。前者は馬桶（モートン）（便器）で後者は寢台である。

扨愈々結婚式當日、定刻男宅では花轎を用意し媒酌人は花聟を案內して新婦を迎へに行く。これを掛岳（イーヨー）と言ふ。花轎が女宅の門前まで來ると樂手は忽ち喇叭を吹奏し銅鑼を打ち

鳴らすので、女宅ではそれ來たとばかり門を閉ぢ幾何かの開門錢を要求する。これを大門(ターメン)包(パオ)、小門包(シヤオメンパオ)といふ。そこで媒酌人は看門的(カンメンテ)（門番）と交渉し相當の値段で妥協が成立すると門は開かれ花轎は入れられるのであるが、これは恐らく賣買結婚の遺風であらう。花轎が大廳に入ると鴛鳥は正面の大卓の上に置かれ三套點心（蓮の實、棗、餃子の類）を出してお婿さんに御馳走し媒酌人にも酒肴が出されるが接待役には近親者の身分の高い若者四人が擇ばれる。一方花嫁の方は洗澡(シーツアオ)（浴み）開臉(カイレン)（絹糸の捩りを戻して生毛に引掛け、再び捩を掛けてその間に挾んで生毛を拔き取り眉を整へる）して處女時代の辮髪を解いて束髪に結つて待つてゐる。そして母親と最後の別れを惜しみ大聲を上げて泣くのであるが、泣聲が高ければ高い程、將來婿の家が富み榮えるといふので花嫁たるもの大聲で泣かざるを得ない。かくして喇叭吹奏裡に花轎に入り、無茶苦茶に叩かれる銅鑼の喧躁を後に新家庭へと出發するのである。新婦が新郎の家に乘り込むには必ず定刻通りに行はれる。一般に時を過せば不吉だと信ぜられてゐるのでこれぱかりは時間勵行である。こゝでも同じ樣に奏樂裡に到着、贊禮生(サンリシヨン)の郎吟と共に花轎は喜娘(シニヤン)（介添の女）に扶けられて轎を出で花聟と並び立ち祖宗を祭り天地を拜し、夫婦互に拜禮する。それが終ると主婚者は紅絲を以つ

て新夫婦の手を結び合せる。「これは月下老人紅絲繫足」の故事から來たものである。そして新夫婦は新房に導かれ三々九度の杯即ち交杯酒を行ひ、内堂に出て父母に叩頭し親戚兄弟と禮を交し再び新房に入り若者達の歌唱のさんざめきを聞きながらこの日の式を目出度終る。

結婚後三日目を三朝と云ひ、新郎は禮服のまゝ厨房に入り、豆腐を鍋に入れて炒る。即ち料理の手始めで家事儉約の意を示す。一ケ月の後、新夫婦は先づ位牌に向つて自家の祖宗を拜し、後里方に行つて先方の祖宗を拜し、女の父母親戚の饗應を受け、婿は其の日に歸り、嫁は一両日泊つて歸る。これを回門(ホイメン)と言ひ、これで結婚の儀式は萬事終了するのである。

葬式の風習　死別を悲しむ人情は何處の國でも變りはないが、支那ではその表情が聊か誇張に過ぎ、哭聲にも唄の樣に節を付け聲を長く引いて如何にも大げさである。

人が息を引き取ると屍體は中堂の正面に移され板床の上に置かれて他人の眼に觸れぬ樣に周圍を白い幃幕で圍む。屍體の仕末即ち殮は死後二十四時間を經て行はれるが、檜葉湯、或ひは香水を加へた水で屍を洗淨し、白布を以て全身を卷き、或ひは衣服を着せ入棺して

海老色黑染、黃色などの衾を掛けて置く。蓋をして棺即ち柩は堂の正面に置かれ、遺子はその側に蓆を敷いて起臥し、晝夜離れずに護る。かうして三日を過ぎ初めて奠を設ける。奠は俗に謂ふ成服で、祭壇を設け、遺像を掛け、喪服を著て死者の靈を祭るのである。近頃ではスピードを好むため成服は通例入棺の翌日行はれる。訃報の通知は死後直ちに報知、又は新聞廣告を行ふこともあるが普通には成服後行はれる。親戚知友の弔訪は從つて成服後出棺までの間に行はれるが、現在は弔客の種類を分け、一定の時日を定めて行はれる。

出殯（出棺）は死後一、二週間、或ひは一個月、或ひは一個年後に行はれる。支那には從來共同墓地が無かつたので、墓地を持つてゐないものは葬儀を濟した後も棺柩を家の內に置いて居つて地所を買求めて埋葬する。墓地を持つてゐる者は埋葬も從つて早い。又本籍地以外の地に居住する者は、その地の會館公所等に一時柩を納めて置き後日故鄉に歸つて埋葬する。訃聞の中によく「暫行出厝於殯屋」とあるのはこれら棺柩を戶外に出して葬儀を行ふことを指すのである。喪服は葬儀の時は、麻衣或は白衣を著け、その後は黑紗の腕章、女は胸章を付ける。最も重い忌服は一個年でその間美服を避け綿服を用ひる。

棺桶は寢棺で、長さ六尺位の厚板の非常に頑丈な作りで、漆を塗り前後の小板に金漆の繪

模樣を施し、緋色の錦繡の掛布を以て覆ふ。普通八人舁ぎであるが、重いものは十二人舁、二十四人舁などとある。

パールバックの「大地」にもある樣に自分の棺桶を死前に豫め當人が用意して置くといふ習慣は我々日本人から見れば氣味惡い樣な習ひである。

神主即ち位牌は栗材を以て作り、高さ一尺二寸、幅三寸の板を二枚合せて作る。外側には「中華民國公民顯參某々府忌之神主」などと誌し、不の傍に「不孝孤子某々謹奉祀」と書く。內側には上に生年月日時と卒年月日時を二行に認め、字は奇數を撰び偶數を避ける。これら神位の題字は著名の人に書いて貰ふのであるが題字を書く日を題主の禮と言ひ、この日は亡者の吉日として一家擧つて吉服を著け、爆竹を放ち彩燈を掛け、すべて紅色を以て裝飾するなど、凡そ喪事とも思はれない賑やかさである。

以上は近代の簡單な葬儀の模樣であるが、古式を尊ぶ家では昔風の複雜な儀式を行つてゐる。その順序を略記すれば次の如くである。

燒轎馬——臨終が近づくと紙製の少さい馬を用意し、愈よ息を引き取ると寢台の後でこれを焚く。亡者は步かずして冥土に着くといふまじないである。

易衣――富者は十二枚襲ねに着かへさせる。今ではフロックコート、軍服、女掛なども用ひる。

打狗餅――冥土に行く途中にあると言ふ惡狗村を通過する時、犬に嚙まれない樣にと龍眼又は麥團子七個を死者の腕に結びつける。

招魂幅――死後上等の絹織物一枚を死者の胸にあてゝ、入棺の時取出す。招魂歸來のためであると言ふ。

入棺、成服、出棺は前に述べた通りである。

路祭――出棺の日、靈柩通過の道筋に祭檀を設けて祭事を行ふ。これは本來親戚知友が醵金して行ふもので、富豪の葬儀には數十の路祭が設けられる。又埋葬地が遠方の場合には沿道の寺院を借りて休憩することがある。之を解槓と言ふ。

鎮堂――棺柩が門を出ると、米一斗を盛りその上に物尺一つ、秤一つ、鏡一つを置き、秤の上に曆書を掛け、旁に織大一盆を置く。

復山――陰陽師により埋葬の吉日が定められ、埋葬の式が終つてから三日目に工事の完成を檢めた上、墓前で祭事を行ふ、これを復山又は復三と言ふ。

完

日支度量衡の比較表

支那では一般の度量衡に就ては、度は尺と云ひ、量は斛と云ひ、衡は秤又は(平)又は(戥子)と云ひ、秤を賣る店を天平店と稱して居る。商人の用ふる度量衡は同一名稱でも地方により或は商賣によつて實際多少の差がある。各地方には色々の商業習慣があつて複雜極りなく適從するところを知らず。

營造尺　一般建築に用ふ　一尺

裁衣尺　普通商人が用ふ　九寸四分(營造尺に對して)

商番尺　粗布販賣の商人が用ふ　九寸二分(營造尺に對して)

(1) 支那の尺と日本の尺との比較

支那尺	日本曲尺
(裁衣尺　都會地) 一尺	一尺一寸三分八二
(都會地田舍) 一尺	一尺一寸二分三
(地面測量定尺) 一尺	一尺〇七分九一
(通常) 一尺	一尺〇六分二八
(宮殿尺) 一尺	一尺〇四分五〇
(政府の統計に用ふる) 一尺	一尺〇三分九三四
(同工部に用ふる) 一尺	一尺〇三分四三
(宮殿工尺) 一尺	一尺〇二分〇〇

(2) 支那の米尺呼稱と日本との比較

支那の呼稱	米尺
一公厘	一耗(千分ノ一米)
一公分	一糎(百分ノ一米)
一公寸	一粉(十分の一米)
一公尺	一米(一米)
一公丈	一籵(十米)
一公引	一粨(百米)
一公里	一秅(千米)

(3) 支那の里程と日本の里程との比較

支那の里程	日本の里程
一步(五尺)	五尺二寸七分八厘
一里(千八百尺即チ三百六十步)	五町十六間六八
一舖(十里)	一里十六町四十六間八

(4) 支那の面積と日本の面積との比較

支那の面積	日本の面積
一平方尺	一・一一四二九一三六平方尺

一歩（一弓平方）　二七・八五二八四平方尺（一弓八五尺）

一畝（廣一歩、從二百四十歩）　六畝五歩七八一五二

一　項（百畝）　六町一反九畝一歩五二

（5）支那の量と日本の量との比較

支那の量	日本の量
一勺（斗ノ千分ノ一）	零勺五七三
一合（斗ノ百分ノ一）	五勺七三一
一升（斗ノ十分ノ一）	五合七勺三一
一斗（一斗）	五升七合三勺一
一斛（五斗）	二斗八升六合五勺
一石（斗ノ十倍）	五斗七升三合一勺
支那の衡目	日本の衡目
一擔（一百斤）	約一百斤
一斤（十六兩）	約百六十二匁七分三厘七八
一兩	約十匁一分七厘一〇三
一錢（兩ノ十分ノ一）	約一匁一厘七一
一分（一錢ノ十分ノ一）	約一厘〇一七一
一厘（一錢ノ百分ノ一）	約一毛〇一七一

支那に於て用ひられて居る秤の種類は紛々として種類が多い、同業者間に用ひらるゝもの商人各自勝手に加減して用ふるもの等區々である。次にその數種を示せば

庫平	納税其他、官廳方面に納むる秤	
公砝平	外國雜貨商等が用ふ	
市平	布綢緞、洋雜貨商が用ふ	
京平	茶、油、酒、煙草、肉、砂糖、果物、雜貨商が用ふ	
其他海關平	一部に用ふ	

秤名		公砝平の一兩に對し
1 公砝平	一・〇〇〇	一・〇〇〇
2 庫平	一・〇〇〇（官庫平一・〇〇〇）（市庫平一・〇〇〇）	一・〇三六 不明
3 海關平	一・〇〇〇	一・〇三四
4 京平	一・〇〇〇	・九七三
5 市平	一・〇〇〇	・九九八
6 湘平	一・〇〇〇	・九九六

支那の國內通貨の不統一と度量衡の複雜なるは世界中にも珍らしい其地方特設の度量衡を用ひ千差萬別なり以上は北京地方に用ひらる。最近殆んど米法に換算せられたけれども日本と同樣一朝一夕に改められず盛んに舊來のものが商習慣として用ひられて居る。

（興中公司編支那棉花ノ問題より轉載）

貨幣の種類

（昭和十四年七月現在）

區域	銀行名	名稱	種類	備考
蒙疆	蒙疆銀行	蒙疆銀行券	百圓、十圓、五圓、一圓、五角一角	民國廿六年十一月設立
北支	中國聯合準備銀行	聯銀券	百圓、十圓、五圓、一圓、五角、二角、一角	民國廿七年三月設立
中支	華興商業銀行	華興券	十圓、五圓、一圓、二角一角	民國廿八年五月設立
	日本銀行	日本圓	十圓、五圓、一圓、五十錢	上海市ニ於テノミ流通ス
		軍票	十圓、五圓、一圓、五十錢	皇軍占領區域
	中央銀行 中國銀行 交通銀行 中國農民銀行	法幣	百元、十元、五元、一元	民國廿五年十一月新幣制ヲ布告シ中央、中國、交通、三銀行ノ發行スル紙幣ヲ法幣ト定ム、更ニ廿六年二月中國農民銀行ヲシテ發行ヲ許可シ、幣制改革ヲ斷行ス
南支	廣東省立銀行 廣州市立銀行	軍票	十圓、五圓、一圓、五十錢	皇軍占領區域
	滙豐銀行 有利銀行 麥加利銀行	毫幣	百元、十元、五元、一元、二角一角	民國廿五年七月、中央政府ノ管理ニ歸ス
		香弗	百弗、二十弗、十弗、五弗、一弗	

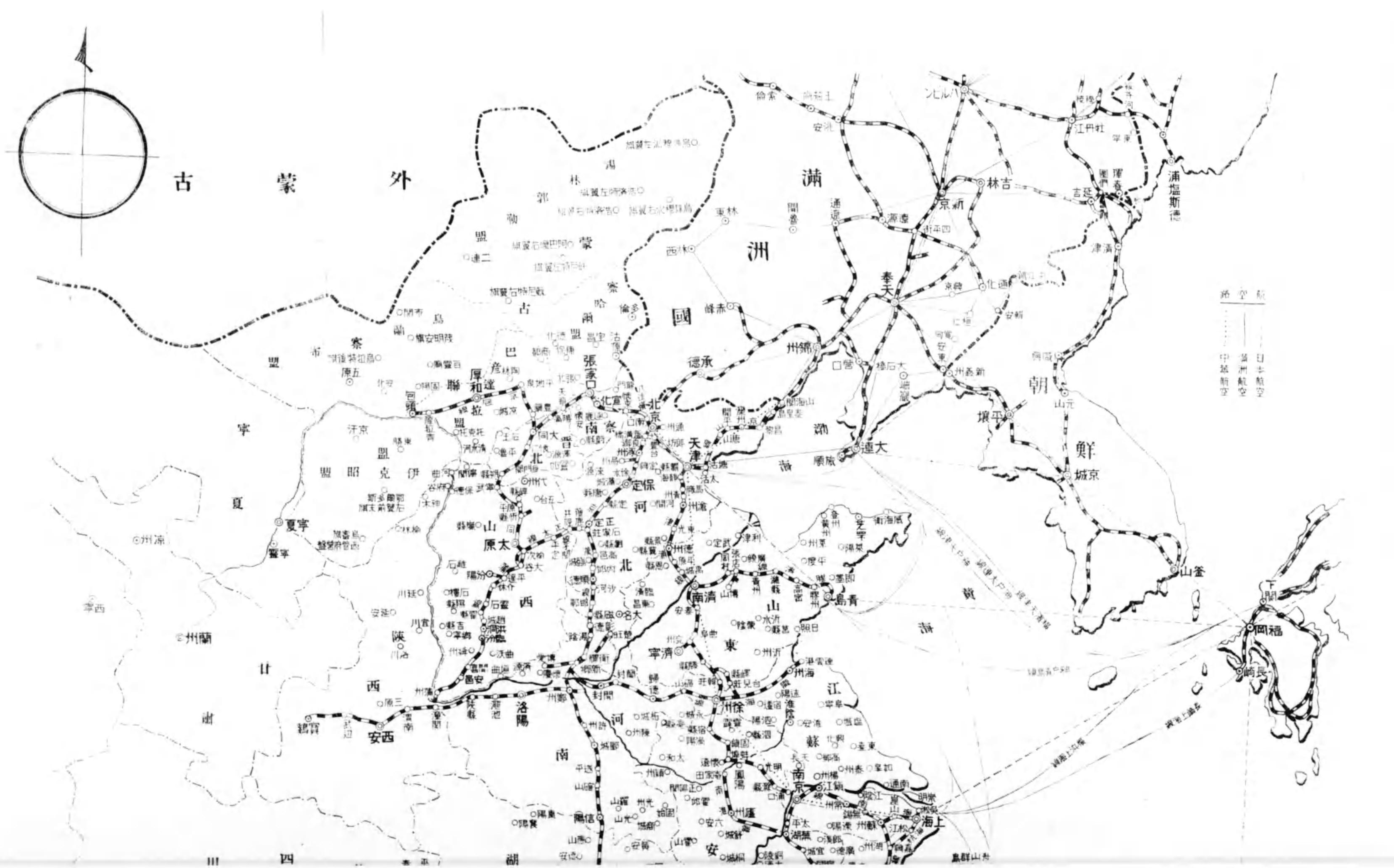
昭和十四年七月二十五日印刷
昭和十四年七月三十一日發行

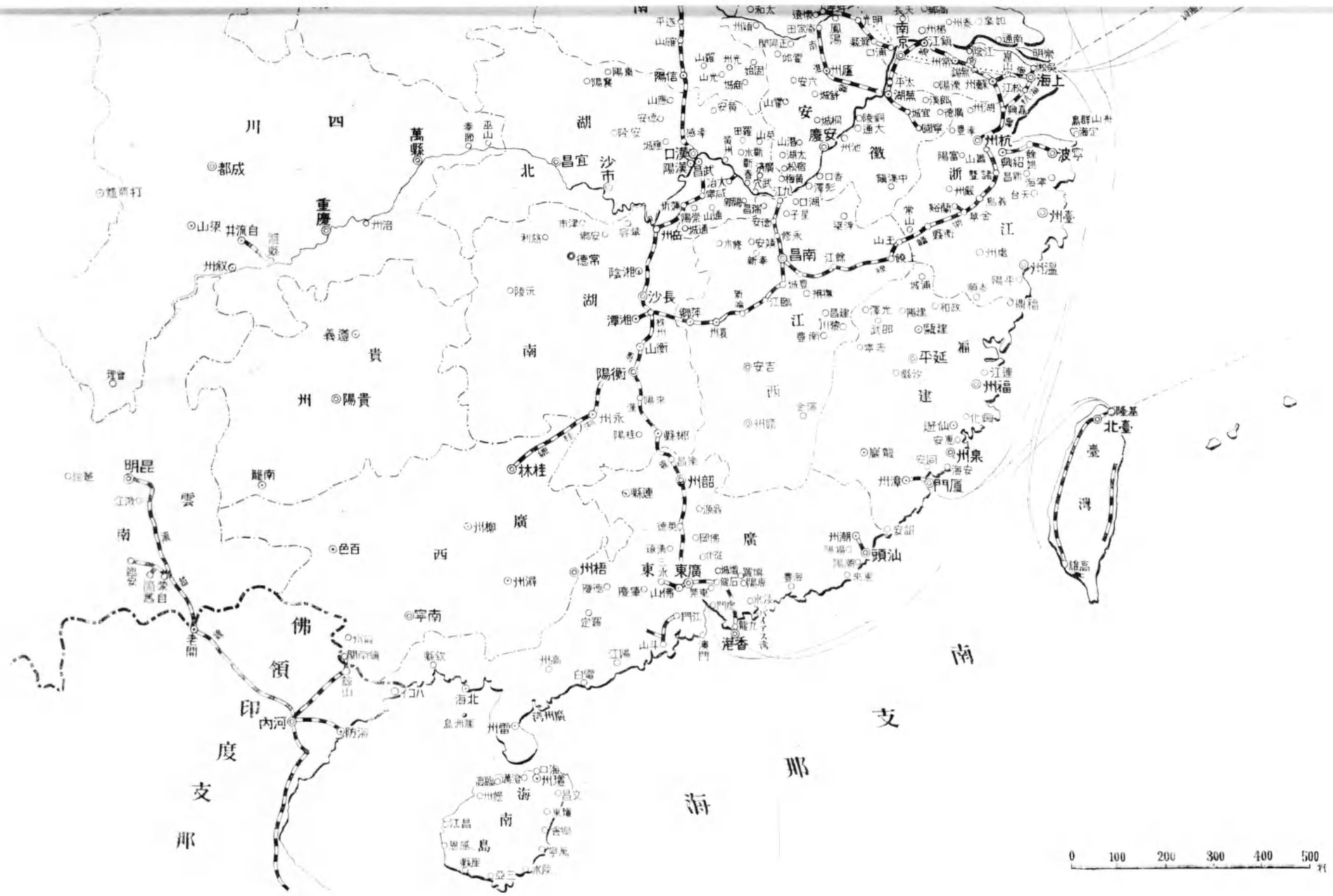
編輯兼發行者　田中酉藏

印刷者　東京市日本橋區濱町三ノ四〇　木村德三

印刷所　東京市日本橋區濱町三ノ四〇　木村印刷所

發行所　東京市神田區駿河臺二丁目一番地ノ一　東亞研究所


外蒙古
滿洲國
朝鮮
渤海
黃海
河北
山西
山東
江蘇
河南
陝西
甘肅
寧夏
北京
天津
奉天
新京
大連
京城
釜山
青島
濟南
徐州
南京
上海
太原
西安
洛陽
張家口
福岡
長崎
下關
航空路
日本航空
滿洲航空
中華航空


南京
上海
杭州
寧波
蘇州
無錫
常州
鎮江
揚州
南通
安慶
蕪湖
合肥
九江
南昌
長沙
湘潭
衡陽
株洲
宜昌
漢口
武昌
重慶
成都
萬縣
貴陽
昆明
廣州
東莞
汕頭
廈門
福州
泉州
香港
澳門
海口
北臺
臺灣
雲南
廣西
貴州
四川
湖北
湖南
江西
安徽
浙江
福建
廣東
海南島
佛領印度支那
南支那海
0 100 200 300 400 500 粁

終